# アウグスティヌスの言語思想の展開

## ――『問答法について』から『キリスト教の教え』まで――

水落健治

### 1　序

アウグスティヌスは、その生涯を通じて言語の問題を考え続けた。その関心は、彼の文法学教師としての経験（三七四―三七六年）および修辞学教師としての経験（三七六―三八六年）に始まり、言語として書かれた聖書をいかに理解し他者に伝達するかという司教としての問題意識を媒介として、神の〈みことば〉Verbum としてのキリストについての思索にまで深められて行く。

そこで本稿では、アウグスティヌスが、キリスト教への回心直後に執筆した『問答法について』*De dialectica* から『キリスト教の教え』*De doctrina christiana* に至るまでに、言語についての思索をいかにして深めて行ったか、その道程を――その背後にあるストアの言語理論との兼ね合いにおいて――経時的に辿ってみる。以下の論述は、世俗的言語理論の枠内に留まるものであるが、彼が『三位一体論』*De trinitate* や『ヨハネ福音書講解』*Tractatus in Iohannis Euangelium* で展開した「神学的〈みことば〉論」の前提をなすものと考えられよう。

### 2　『問答法について』*De dialectica*（三八六年）

『問答法について』は、アウグスティヌスがキリスト教への回心直後に執筆した息子アデオダトゥスとの対話篇の草稿[1]であるが、アウグスティヌスの言語思想の核となるものは、すでにこの著作において現れている。以下、四つの箇所を取り上げる。

## 2・1 「音と意味の複合体」としての〈ことば〉の定義

『問答法について』の実質的議論は第五章から始まるが、その記述は次の定義によって始められる。

> [1410.29][2]〈ことば〉uerbum は、いかなる〈もの〉res の〈しるし〉signum でもある。これは〈語る者〉loquens によってもたらされると、聴く者によって理解されることが可能である。〈もの〉res は、感覚されるか、理解されるか、あるいは隠されているかのいずれかである。〈しるし〉signum とは、それ自体を感覚に示すとともに、それ自体とは別の何かを魂に示すもののことである。〈語る〉loqui とは、〈分節化した〉articulata 声によって〈しるし〉を与えることである。私が「分節に分かれた」articulata と語るのは、〈文字〉litterae によって把捉可能なもののことである。[3]

この箇所では、人が議論 dialectica を行う媒介としての〈ことば〉uerbum が定義され、その被定義項に用いられる〈もの〉res、〈しるし〉signum が次に定義され、さらに〈語る〉loqui の被定義項に用いられる〈文節化した声〉articulata uox の articulata が定義されるという定義の連鎖が現れているが、ここで特に注目されるのは次の二点である。

(1) signum の定義は ‘et ... et ...’ 構文で定義されている。

$$\text{Signum est}\left\{\begin{array}{ll}\text{et se ipsum} & \text{sensui}\\ \text{et propter se aliquid animo} & \text{ostendit}\end{array}\right.$$

(acc.) (dat.)

(2) verbum の定義に ‘uniuscuiusque’ という語が付加されている。

第一に、〈しるし〉signum は、（一）それを受容する者の感覚にそれ自身を示し、（二）それを受容する者の魂にそれ自身とは別の何かを示す、とされているが、この働きは‘et … et …’構文で定義されている。このことは、〈しるし〉の感覚に対する働きと魂に対する働きとの同時性・二重性を示している。

第二に、〈ことば〉の定義に「いかなるものの」uniuscuiusque という語が付加されていることは、〈ことば〉という〈しるし〉の、他の〈しるし〉に対する卓越性を示唆している。[4]

## 2・2 「〈しるし〉の〈しるし〉」signum signorum としての〈メタ言語〉

これに続く箇所で、アウグスティヌスは、〈ことば〉を構成するものとして（一）〈（狭義の）ことば〉uerbum（＝音声としてのことば）、（二）〈語られうるもの〉dicibile（＝意味）、（三）〈発語〉dictio、（四）〈もの〉res の四つの要素を掲げ、これらの意味表示における相互関係を次のように述べる。

［1411.18］先にわたしが〈ことば〉と呼んだものは、〈ことば〉であると同時に〈ことば〉を意味表示する。またわたしが〈語られ得るもの〉と呼んだものは、それ自体〈ことば〉ではあるが、〈ことば〉を意味表示することはせず、「〈ことば〉において理解され魂に保たれるもの」を意味表示する。またわたしが〈発語〉と呼んだものは、それ自体〈ことば〉であるが、これらふたつのもの、つまり〈ことば〉それ自体と「〈ことば〉によって魂のうちに起こるもの」を同時に意味表示する。またわたしが〈もの〉と呼んだものは、それ自体〈ことば〉であり、いま語られた三つのものに加えて、残された一切のものを意味表示する。[5]

この記述の背後には、「〈ことば〉という〈しるし〉が他の〈ことば〉の〈しるし〉（i.e. signum signorum）となり得る」という「メタ言語」の意識が明確な形で存在している。前節における「〈ことば〉uerbum は、いかなる〈もの〉res の〈しるし〉signum でもある」という定義は、このような〈メタ言語〉の意識を踏まえて行われたものであっ

た。

## 2・3〈ことばの音〉と〈ことばの意味〉との相互関係
### ――ストアの言語起源論

続く第六章では、〈ことば〉の起源の問題が論じられる。

> [1411.62]〈ことば〉の起源についての探求は、その〈ことば〉について「どこからそのような仕方で語られるのか」ということが探求されるときに行われる。しかし、わたしの考えによるなら、この事項は、必須なことがらというよりはむしろ好奇心に由来することがらであろう。……
>
> [1411.73] すなわち、たとえば〈ことば〉uerba それ自体についても、ある人は、これがそう呼ばれるのは、これ（＝〈ことば〉）が耳を震動させる aurem uerberare からだと考えているし、また別の人は、〈これがそうよばれるのは〉むしろ空気を震動させる aerem uerberare からだと考えている。……けれども、第三の人は、見よ、予期せぬ所からどれほどの混乱を惹き起こすであろうか。その人の語る所によれば、われわれは真なるもの quod uerum を語るべきなのであって、嘘 mendacium は、その本性それ自体の判定によって憎まれるものなのであり、したがって、〈ことば〉uerbum は〈真なるもの〉uerum から名づけられた cognomare のだという。……[6]

音声としての〈ことば〉とその〈意味〉との間に必然的関係があるのか、という問題は、プラトン『クラテュロス』以来しきりに論じられた問題であったが、両者の関係を社会的契約 συνθήκη において捉えようとしたペリパトス派[7]に対して、ストア派の人々は、擬音語や擬声語の場合を手掛かりに両者の必然的関係を主張した。アウグスティヌスは、このようなストア派の考えを

> しかし、わたしの考えによるなら、この事項は、必須なことがらというよりはむしろ好奇心に由来することがらであろう。

と批判しているが、その一方で、この問題を論じる第六章

は他の章と比較して異常に長大であり、アウグスティヌスが「〈ことば〉とその〈意味〉との間の関係」について微妙な態度を取っていたことを示している。その理由はおそらく、彼が「〈ことば〉はその音声のみでも聴き手に何らかの作用を及ぼす」（次節参照）と考えていたことと無関係ではないであろう。

### 2・4　ことばの〈音〉と〈意味〉が伝えるもの――uis uerbi

続く第七章では、〈ことば〉がそれを聴く者にいかなる作用を及ぼすかが〈ことばの力〉uis uerbi の概念の下で、三つの場合に分けて論じられる。

> [1413.60]〈ことばの力〉とは、〈ことば〉がいかに力をもつかを認識せしめるものである。しかるに、〈ことば〉が力をもつのは、聴くものを動かすことが可能なかぎりにおいてである。しかるに、聴く者を動かすのは、（一）それ自体としてであるか、（二）それが意味表示するものにしたがってであるか、（三）両者から共に、であるかのいずれかである。[8]

> [1413.67]（一）［感覚が］自然本性的に動かされるのは、もし誰かが「アルタクセルクセス王」（Artaxerxes rex ＝ペルシアの王）の名を語ったときに感覚が打たれたり、「エウリュアルス」（Euryalus ＝ 美少年、*Aeneis* 5.294f）という語を聴いたときに感覚が和らげられたりする場合である。すなわち、一体誰が、これらの名前をもつ人々についてそれまで何も聴いたことがないとしても、前者の中に〈この上なくザラザラしたもの〉があり、後者の中に〈なめらかさ〉があると判断しないだろうか。……[9]

> [1414.8] また、（二）〈ことば〉が、それ自体としてでなく、「その意味表示するもの」に従って聴く者を動かすのは、魂が〈ことば〉を媒介として〈しるし〉を受け取ると、自らが受け取ったものがそのものの〈しるし〉であるような〈もの〉自体のみに注目する場合である。たとえば、‘Augustinus’［という〈ことば〉が］名前として発せられたときに、わたしを知っている人が、ほかならぬわたしを思惟する場合、あるいは、

わたしを知らない人や‘Augustinus’と呼ばれる別の人を知っている人が、この名前をたまたま聴いたとき、その人の精神に誰か人が思い浮かぶ、そのような場合である。[10]

[1414.16] さらにまた、（三）〈ことば〉がそれを聴く人を「それ自体」および「それが意味表示するもの」の双方にしたがって動かす場合には、〈発音〉および〈発音〉から伝えられるものとの双方に対して同時に注意が向けられる。たとえば誰かが、

> 彼は、手と腹と局部 penis で父親の遺産を使い果してしまった。
>
> （Sallustius, *Bellum Catilinae* 14, 2）

という言葉を聴くとき、耳の貞潔が損なわれないのは一体どうしてなのであろうか。[11]

これら三つの場合の内の第二の場合は、「人が特定の〈ことば〉を聴きその意味を思い浮かべる」という通常の場合の記述であるが、ここでわれわれが特に注目したいのは、第一の場合と第三の場合である。 第一の場合は、〈ことば〉が純粋な音声としてその聴き手に何らかの働きかけを行うことを述べている。たとえば、‘Artaxerxes rex’という〈ことば〉を聴いた人は、そこに含まれる三個の破裂音（‘x’という音声）のゆえに、たとえその意味を知らなくても何か「ザラザラしたもの」asperitas を思い浮かべる。

また‘Euryalus’という〈ことば〉を聴いた人は、そこに含まれる二個の流音（‘r’および‘l’）のゆえに、たとえその意味を知らなくても何か「滑らかなもの」lenitas を思い浮かべる。つまりここでは

> 1. ‘x’という破裂音は、自然本性的に「ザラザラしたもの」を指し示す
> 2. ‘l’や‘r’という流音は、自然本性的に「滑らかなもの」を指し示す

という事態が指摘されているのである。この指摘は、ストアの言語論における〈しるし〉σημεῖον の理論を前提している。ストアの言語論においては、「もしAであるならB

である」という条件命題が自然本性的に成立する場合に、「AはBの〈しるし〉σημεῖον である」と言われるが、[12]

たとえば、「もし女に乳が出るなら、その女は妊娠している」という命題が成立する場合に、「〈女に乳が出る〉は〈女は妊娠している〉の〈しるし〉σημεῖον である」と言われる。

アウグスティヌスは、〈ことば〉が有する自然本性的側面（e.g. 悦びの叫び、悲しみの叫び、苦悶の叫び etc. は言語によって異ならない）をこのようなストアの σημεῖον 理論によって説明するのである。また第三の場合は、「同一のことがらが語られる場合であっても、用いられる〈ことば〉によって印象が異なる」という事態を、第一の場合（＝〈ことば〉の音が与える印象）と第二の場合（＝〈ことば〉の意味）との複合現象として説明している。たとえば、人が

彼は、手（＝賭博）と腹（＝美食）と局部 penis（＝買春）で父親の遺産を使い果してしまった。

という語を聴くとき、「耳の貞潔が失われない」のは、「意味表示されている〈もの〉の汚らしさが、意味表示する〈ことば〉の飾りによって覆われている」turpitudo rei quae significata est decore verbi significantis operitur からなのである。[13]

## 3 『教師』*De magistro*（三八九年）

『教師』は、『問答法について』の三年後の三八九年に執筆された息子 Adeodatus との対話篇であるが、『問答法について』で提示された言語思想は、他者への「伝達」（docere）の問題を論ずる本著作で飛躍的に深まって行く。以下、幾つかの特徴的な点を確認しておきたい。

### 3・1 〈しるし〉signum を媒介とした伝達と〈しるし〉を媒介としない伝達（『教師』二・三―三・六）

対話開始直後、アウグスティヌスは、‘si’（もし～ならば）、‘nihil’（無）、‘ex’（～から）という、その意味を説明することが困難な語を含むウェルギリウス『アエネイス』の一節を引用したのち、「特定の〈ことば〉が意味表示する〈も

の〉」を〈しるし〉signumを媒介とせずに示すことができるか」という問題を提起する。

［『教師』二・三］

Aug.：ではどうだろう。〈しるし〉は何かを意味表示するのでなければ、〈しるし〉たり得ないではなかろうか。

Ad.：その通りです。

Aug.：では、次の詩句には幾つの〈ことば〉があるかね。

Si nihil ex tanta superis placet urbe relinqui.

(Verg.*Aen.*2.659.)

Ad.：八つです。

［『教師』二・四］

Ad.：第三の前置詞は‘ex’ですが、わたしたちは、これの代わりに‘de’と言うdicere ことができると思います。

Aug.：わたしが求めているのは、「ある極めてよく知られた音声 vox の代わりに、それと同一のことを意味表示しているもう一つの同じくらいよく知られた音声を発するdicere」ということなのではない。

そして〈しるし〉を媒介としない伝達のとして「実物提示」の場合を掲げる。

［『教師』三・五］

Ad.：わたしの答えによってはお望みのことが起こるのは全く不可能だということ――このことをお父さんが知らないとは驚いたことですね。……お父さんの求めているのは〈もの〉であり、それはどのようなものであるにせよ〈ことば〉ではありません。しかもお父さんですらその〈もの〉を〈ことば〉によってわたしから求めておられるのだからです。ですから、まずおとうさんの方が〈ことば〉なしに求めて下さい。そうしてくださったら、わたしが同じ仕方で答えましょう。

Aug.：おまえの言う〈行う〉ことは正しいと告白する

よ。だがもしわたしが、「壁」paries と語られるのを聞いて「あの三音節は何を意味表示するのか」と求めたとしたなら、その時には、おまえは「指」digitus で示すことによって、わたしが〈もの〉res それ自体を見るようにすることが可能なのではなかろうか。その〈もの〉は、その三音節が属するものであるが、おまえはいかなる〈ことば〉をも参照する referre ことなしにそれを示している demonstrare ……。

その後、『教師』三・五―六では、「実物提示」の様々な場合が論じられ（e.g.「歩くとは何か」と問われて歩いてみせる場合 etc.）、次いでその〈限界〉が論じられる。

1. 問われたものが名詞でない場合、実物提示は不可能である。
2. 問われたものが眼前にない場合、実物提示は不可能である。
3. 歩いている最中に「歩くとは何か」と問われた場合、実物提示は不可能である。

これらの議論の根底には、「〈ことば〉uerbum という〈しるし〉の他の〈しるし〉に対する卓越性」の意識が横たわっている。前掲の『問答法について』第五章では、〈ことば〉なるものの卓越性が「〈ことば〉はいかなるものの〈しるし〉でもある」uerbum est uniuscuiusque rei signum という語で示されていたが、『教師』におけるこの議論は、〈ことば〉なる〈しるし〉がいかなる点で他の〈しるし〉よりも卓越しているかを具体的な場面で示したものということができよう。

### 3・2 〈メタ言語〉の諸相――相互に意味表示する〈しるし〉、自己を意味表示する〈しるし〉etc.（『教師』四・九―六・八）

その後議論は、実物提示の問題（i.e.〈もの〉は〈しるし〉を媒介とせずに提示されるかという問題）から、その逆の場合へと展開し、〈しるし〉は〈しるし〉を媒介として提示されるか、という問題が論じられるに至る。そしていわゆる〈メタ言語〉の問題がさまざまな仕方で論じられる。

［『教師』四・九］

Aug.：では次のことをも答えてもらいたい。〈ことば〉は〈名前〉の〈しるし〉であり、〈名前〉は「流れ」の〈しるし〉であり、「流れ」は「今見ることのできる〈もの〉」の〈しるし〉であった。そしておまえは、この〈もの〉とそれの〈しるし〉である「流れ」との違いがどのようなものなのか、またこの〈しるし〉(i.e.「流れ」)とこの〈しるし〉の〈しるし〉である〈名前〉との違いがどのようなものなのかについて語った。とするならば、おまえは、〈名前〉の〈しるし〉――それは〈ことば〉だと我々は発見したわけだが――と、〈名前〉それ自体――これの〈しるし〉が〈ことば〉であるとの間にはどのような違いがあると考えるだろうか。

Ad.：わたしの理解では、違いは次のようなものです。つまり、〈名前〉によって意味表示されるものは〈ことば〉によっても意味表示されます――というのも、〈名前〉が〈ことば〉であるように「流れ」も〈ことば〉なのですから――、しかし〈ことば〉によって意味表示されるものすべてが〈名前〉によっても意味表示されるわけではありません。……それゆえ、すべての〈名前〉は〈ことば〉であるが、すべての〈ことば〉が〈名前〉なのではない、ということからすると、〈ことば〉と〈名前〉との違い、すなわち、他のいかなる〈しるし〉をも意味表示しない〈しるし〉の〈しるし〉(i.e.〈名前〉)と、さらに他の〈しるし〉を意味表示する〈しるし〉の〈しるし〉(i.e.〈ことば〉)との違いは明らかだと思います。……

Aug.：とするなら、〈名前〉と〈ことば〉との関係は、馬と動物との関係に等しいことになる。

そして次の場合が論じられる。

1. 相互に意味表示する〈しるし〉(e.g. 'nomen' と 'uerbum') …… *De mag.* 5.11-16
2. 自己を意味表示する〈しるし〉(e.g. 'nomen') …… *De mag.* 6.17-18

こうして、他の〈しるし〉を意味表示する〈しるし〉、いわゆるメタ言語が、極めて複雑な意味表示の相互関係を構成していることが示される。

### 3・3　いわゆる〈質料代表〉suppositio materialis の問題（『教師』八・二三―二四）

続く二三―二四節では、ひとつのローマの冗談を手掛かりに、特定の語が「音声としての自己自身」を指し示す場合の存在が指摘される。

［『教師』八・二三］

「今、僕は君の口からライオンを出してみせよう」――「えっ、ライオン?」――「ほら、ライオンが君の口から出た!」（ローマ人の冗談）

通常、ひとつの〈ことば〉はそれが意味表示する〈もの〉の代換物として用いられる。たとえば「キケロは政治家である」という文の主語である「キケロ」は歴史的人物としてのキケロの代換物である。しかるに、「キケロは三音節の語である」という文の主語である「キケロ」は音声としての「キケロ」それ自体として（i.e. 実物提示として）用いられている（いわゆる「質料代表」suppositio materialis）。そしてアウグスティヌスは、特定の語の通常の用法と質料代表としての用法の違いを次のように述べる。

［『教師』八・二四］

Aug.：……けれども、もし誰かが「人間とは何か」と――それが「名詞」か「動詞」かと問うことなしに――問うとすれば、精神はかの好ましい言語の規則によって placita illa loquendi regula「動物」と答えるだろう。

……

すなわち、自然的にきわめて強い力を持つ規則によって ea scilicet regula, quae naturaliter plurimum ualet、われわれの注意 intentio は、〈しるし〉を聴くとき、その〈しるし〉が意味表示しているものへと導かれるのだ。

### 3・4　被伝達者が全く見たり聞いたりしたことのないものを〈しるし〉を媒介として伝達できるか（『教師』一〇・三三）

ここまで深められて来た議論は、いわば「精神の力と眼差しを訓練する」ための「前奏」praeludo（*De mag.*8.21）

であったが、これらの議論を踏まえて本書の中心的な問題、すなわち「被伝達者が全く見たり聞いたりしたことのないものは〈しるし〉を媒介として伝達できるか」という問題が取り上げられる。そして次のような否定的な結論が導き出される。

［『教師』一〇・三三］

Aug.：だが、もしわたしたちがさらに念を入れて考えるなら、おそらくお前は「その〈しるし〉によって学ばれるものは何もない」ということを見出すだろう。なぜなら、〈しるし〉がわたしに与えられる場合、もしわたしが「その〈しるし〉がどんな〈もの〉の〈しるし〉か」ということを知らないということが分かるなら、その〈しるし〉はわたしに何も教えることはできないし、他方、もしわたしが知っているということが分かるなら、わたしは一体何をその〈しるし〉によって学ぶのだろうか。わたしが「そして彼らの sarabarae は損なれない」（ダニ三・九四）という文を読むとき、その語（sarabarae）は、それが意味表示している〈もの〉を示しはしないのである。[14]

### 3・5　教師 magister としての〈内なるキリスト〉

そして、本書の結論が次のように述べられる。

［『教師』一一・三六］

Aug.：わたしが〈ことば〉に最大限帰することができる価値は、せいぜい次のことだ。――〈ことば〉は私に〈もの〉を探求すべく促しはするものの、〈もの〉を示してわたしたちがそれを知るようにすることはない。だがわたしが知りたいと思うことがらを、眼や何かの感覚、あるいは精神 mens それ自体に提示する者は、わたしに何らかのことを教えている。[15]

［『教師』一一・三八］

Aug.：だが、わたしたちが理解する普遍的なことがら uniersa については、私たちはおそらく、〈ことば〉によって真理と相談すべく促されるのではあるが、外界で音声を響かせる話し手に相談するのではなく、内的に精神を支配する真理に相談するのだ。しかるに、その相談される者、教える者、〈内なる人〉の中に住み

たもう者は、キリストと呼ばれる不動かつ永遠なる神の知恵である。[16]

『教師』は『問答法について』の僅か三年後に執筆されたアウグスティヌスの第二の言語理論書である。しかしそこに展開される思想は、『問答法について』の基本線を受け継ぎながらも大きな深化を遂げている。特に、知性認識 intellegere の対象たる普遍的なことがら uniuersa の認識における〈ことば〉の限界性の指摘は、アウグスティヌスがいわゆる〈照明説〉に向けて一歩を踏み出したことを示しているといえよう。

## 4 『告白』Confessiones 一・八・一三
## ――子どもはいかにして言語を学ぶか（三九七―四〇〇年）

『告白』第一巻では、自らの幼年時代を回想しつつ、子どもが初めて言語を学ぶという事態に即して深い考察が展開される。

### 4・1 『告白』一・八・一三の本文

まずは、この箇所の本文を引用する。

わたしは、幼年時代からさらに進みつつ子供時代へとやって来たのではないのでしょうか。あるいはむしろ、子供時代が私の内へとやってきて幼年時代に続いたのでしょうか。しかし幼年時代は立ち去ったわけではありません。というのも、一体どこに消えるのでしょうか。とはいえ、それはもうありませんでした。つまりわたしは、もの言わぬ幼児ではなく、今や言葉を話す子供になっていたのです。[17]

わたしはこのことを覚えています。そしてわたしが、どこから話すことを学んだのかについて注意を向けたのは、後になってのことでした。というのも、少し後に文字を学んだ場合のように、年長の人々がわたしに、一定の秩序をもった教えの言葉を提示して教えたわけではなく、わが神よ、あなたがわたしに与えてくださった精神によって、わたし自らが自らを教えたのだからです。[18]

つまりわたしは、さまざまな呻きや声、さまざまな手足の動きによって心に思ったことを表現して、みず

からの意思に従わせようとしたのですが、みずから欲したすべてのことも表現できなかったし、欲したすべての人に対しても表現できなかったのです。[19]

わたしは、年長の人々が何らかのものを呼んでいたときに、[そのことを] 記憶で捉えてゆきました。また、その声に応じて身体を何かに向かって動かそうとするときに、[そのことを] 見てゆきました。そして、彼らがそのものを示そうとするときに、それが彼らによってこの響きによって呼ばれることを把持してゆきました。[20]

しかるに、彼らがこのことを意志していることは身体の動きから明らかでした。身体の動きは、いわば、すべての民族に共通な自然言語 uerba naturalia であり、事物を求めたり、所有したり、排斥したり、避けたりするときの魂の状態 affectio animi を指し示す表情や眼のうなづき、その他の手足の動き、声の響きによって起こります。[21]

こうして、さまざまな文の中でそれぞれの位置に配置されている語 uerba を繰り返し聴く内に、わたしは、それらの語がいかなる〈もの〉のしるしであるのかを少しずつ推論し、口をこれらの〈しるし〉の中で飼い慣らして、自らの意志を表明し始めました。[22]

このようにしてわたしは、わたしがその間にいる人々と、意思を表明するための〈しるし〉を交し、両親の権威と年長の人々のうなづきに頼りながら、荒々しい人間の生の社会に、一層深く乗り出したのでした。[23]

### 4・2　子どもが言語を学ぶ過程

この箇所では、子どもが言語を学ぶ過程が次のような段階として述べられている。[24]

1. 自分勝手な〈しるし〉では、みずからの意思を伝えられないことを知る。
2. 〈もの〉と〈しるし〉との対応関係を三つの仕方で知って行く。
   a. 〈もの〉と〈しるし〉とが共存する場合、子どもはその〈もの〉と〈音声〉とを同時に感覚することを繰り返すことによって、両者の対応関係を記憶 memoria に蓄えて行く。

b. 〈もの〉と〈しるし〉とが距離的に離れている場合、子どもは、年長者が特定の〈音声〉を発しつつ特定の〈もの〉に向かって身体を動かして行くことを繰り返し感覚することによって、その〈音声〉と〈もの〉との対応関係を知り、それを記憶して行く。

c. 〈音声〉のみが現存する場合、子どもは年長者の発する〈音声〉を繰り返し感覚することによって――これを上記二つの場合と結合しつつ――〈音声〉と〈もの〉との対応関係を知り、これを記憶して行くことができる。

3. 文の中でしか学ぶことのできない語の意味を、文の文法的構造の中から推論 collegere する。[25]

4. 心の中の様々なことがらをみずからの学んだ言語に「適合させ」、みずからの意思を表明し始める。

5. 荒々しい人間の生の社会の中に、一層深く乗り出してゆく。

### 4・3　子どもが言語を学ぶに際して起こっている特異な事態

アウグスティヌスがこの記述を通して語るのは「子どもが初めて〈ことば〉を学ぶとき、特異なできごとが生起している」という事実である。

通常、われわれが何かを学ぶとき、そのことがらを〈ことば〉を媒介として学習する。しかるに、子どもが初めて〈ことば〉を学ぶ場合、子どもは学習の媒介としての〈ことば〉を知らないのであるから、〈ことば〉を媒介として〈ことば〉を学ぶことはできない。では、子どもが初めて〈ことば〉を学ぶときに起こっているのはいかなることか。アウグスティヌスこの〈謎〉の考察を通して、身体の動き、すなわち顔の表情、眼のうなづき、その他の手足の動き、声の響きといった〈自然的なことば〉uerba naturalia の果たす決定的役割を発見する。アウグスティヌスはこれらを「すべての民族の自然的ことば」uerba naturalia omnium gentium（＝すべての民族に共通な自然的ことば）と呼んでいるが、これが『問答法について』における〈ことばの力〉uis uerbi を発展させたものであることは明らかであろう。‘Artaxerxes Rex’という語を聴いた人は、そこに含まれる破裂音のゆえに何かザラザラしたものを、‘Euryalus’という語を聴いた人は、そこに含まれる流音のゆえに何か

滑らかなものを自然本性的に思い浮かべる。同様に、子どもは身体の動きや顔の表情、うなづき、声の響き等によって、それらと同時に発せられる〈音〉とそれが指し示す〈もの〉との対応関係を自然本性的に学んで行くのである。

## 5 『キリスト教の教え』*De doctrina christiana* 二・一・一―二・四・五――〈自然的なしるし〉と〈与えられたしるし〉（三九七―八／四二六―七年）

ここまで展開されて来たアウグスティヌスの言語思想は、『キリスト教の教え』*De doctrina christiana* における〈しるし〉signum 論として結実する。

『キリスト教の教え』は、三九六年に北アフリカ・ヒッポの司祭に就任し例外的に説教を許されたアウグスティヌスが、みずからの説教の結果、若い司祭たちの間に燃え上がった聖書研究への機運に応える形で執筆された「聖書解釈とその内容の他者への伝達の仕方」に関する著作である。[26]

著作は、「〈もの〉と〈しるし〉」という構造に従って執筆され、その第一巻では、言語という〈しるし〉によって書かれた聖書が指し示している〈もの〉の内容が「キリスト教信仰の内容」として示され、第二～三巻では〈しるし〉に関する議論が展開され、第四巻では聖書解釈の結果として捉えられた〈もの〉をいかにして他者に伝達するか、という方法が修辞学 rhetorica の問題と絡めて論じられる。

### 5・1〈自然的なしるし〉signa naturalia と〈与えられたしるし〉signa data ――定義と実例

そして、第二巻冒頭で〈しるし〉が二種類に区分され、それぞれ次のように定義され、その実例が提示される。

#### 1 自然的なしるし signa naturalia

意味表示しようとする意思ないし何らかの欲求なしに、みずからとは別に、みずからが原因となって何か他のものが認識させられる〈しるし〉

(signa) quae sine uoluntate atque ullo appetitu significandi praeter se aliquid aliud ex se cognosci faciunt (*De doct. christ.* 2.1.2)

［実例］

1. 煙」を見てその下にある「火」を思惟する場合の「煙」
2. 獣の「足跡」を見て「獣」を思惟する場合の「足跡」
3. 人間が怒ったり悲しんだりする場合の顔の「表情」uultus
4. 人間が怒ったり悲しんだりする場合に発せられる「間投詞」interiectio (ibid.)

## 2　与えられたしるし signa data

何であれ生けるものが、みずからの魂の動き――いかなる感覚されたものであれ知性認識されたものであれ――を示すためにお互いに与え合う〈しるし〉(signa) quae sibi quaeque uiuentia inuicem dant ad demonstrandos, quantum possunt, motus animi sui uel sensa aut intellecta quaelibet (*De ct. christ.* 2.2.3)

［実例］

1. 視覚に属するもの：頷き、身振り、軍旗、とりわけ文字
2. 聴覚に属するもの：何かを意味表示するラッパ、笛、琴、とりわけ言語
3. 嗅覚に属するもの：キリストの足元に注がれた香油の香り（ヨハネ一二・三）
4. 味覚に属するもの：ミサでのパンと葡萄酒の味
5. 触覚に属するもの：キリストの着物に触れて癒やされた女の接触（マタイ九・二一）

### 5・2　〈自然的なしるし〉

ここに述べられる「自然的しるし」の定義と実例とを見ると、これが『問答法について』における〈ことばの力〉uis uerbi および『告白』第一巻における〈自然的なことば〉をさらに深めたものとなっていることが分かる。すなわち、ここにはストアの σημεῖον として典型的な「火の〈しるし〉としての煙」、「動物の〈しるし〉としての足跡」のみならず[27]、われわれが日常的に経験する顔の表情や間投詞（i.e. 叫び etc.）が含まれており、しかもこの場合の〈し

るし〉と〈もの〉との関係が「自らが原因となって」ex se という自然的関係を示す語によって明確に示されている。

### 5・3〈与えられたしるし〉

また、与えられたしるし」について見てみると、これについては

1. 〈与えられたしるし〉は、生けるもの uiuentia がお互いに与え合うしるしである。
2. 〈与えられたしるし〉は、生けるものが自らの「魂の動き」motus animi を示す demonstrare ために与えられる。
3. 「魂の動き」の内容は、可感的なもの sensa であるか、可知的なもの intellecta であるかのいずれかである。[28]

ということが述べられている。

人間などの「生けるもの」uiuentia は、時間的に可変的な存在であるがゆえに、様々な可感的ことがらや可知的なことがらを自らの魂の内で絶えず思惟 cogitare している。これが「魂の動き」motus animi である。[29] しかるに、その内容は魂の内で生起していることなので、他者は直接これを知ることはできない。そこで生けるものは他者にこれを示す demonstrare ために何らかの手段を講ずる必要があり、そのために用いる〈しるし〉が「与えられたしるし」なのである。

「与えられたしるし」の実例として述べられているものの典型は「言語」と「文字」であるが、その他にも軍旗や信号を発する楽器（ラッパ、笛、琴）がここに掲げられていることからすると、これは〈社会的契約〉συνθῆκη によって成立する〈しるし〉と考えられる。

またここに頷きと身振りが加えられているのも、これらが地域や民族によって異なるからに他ならない。[30]

さらにここでは、聖書に記されている実例として、「キリストの足元に注がれた香油の香り」、「ミサでのパンと葡萄酒の味」、「キリストの着物に触れて癒やされた女の接触」の三つが極めて示唆的に掲げられている。[31]

ここに至って、アウグスティヌスの言語思想はひとつの普遍的な完成形に到達したということができる。すなわち

彼は、人間の生が無数の〈自然的しるし〉や〈与えられたしるし〉に満ち満ちていること、人間はそれらの指し示す〈もの〉を無意識的・意識的に捉えつつ日々生きていることをこの段階に至って明確に自覚し、音声としての〈ことば〉と〈ことば〉の〈しるし〉としての〈文字〉とを、それら無数の〈しるし〉の中に位置づけたのである。

## 6　まとめ

以上われわれは、アウグスティヌスがキリスト教への回心直後に執筆した『問答法について』から『キリスト教の教え』に至る言語思想の展開を概観して来た。われわれが、この展開において特に注目しなければならないのは、ストアの〈しるし〉σημεῖον 理論の存在である。

この理論は、彼の言語思想が『問答法について』における〈ことばの力〉uis uerbi の考察に始まり、『告白』第一巻における〈自然的なことば〉uerba naturalia を経て『キリスト教の教え』における〈自然的しるし〉signa naturalia へと展開して行くに際しての、いわば通奏低音となっている。

〈ことば〉は、改めて述べるまでもなく〈社会的契約〉によって成立するものであるが、アウグスティヌスは、この〈ことば〉をストアの〈しるし〉σημεῖον との対比において考察することによってみずからの言語思想を深めていったということができるのである。

そして彼が『三位一体論』や『ヨハネ福音書講解』で展開した「神学的〈みことば〉論」は、このような世俗的領域における言語思想の展開と深化があったからこそ、可能になったというべきであろう。

（明治学院大学名誉教授）

註

（1）J. Pépin, *St. Augustin et Dialectique*, Villanova Univ., p. 30.

（2）以下、本章における鉤括弧内の数字は Migne, *PL* XXXII の column 番号と行番号を示す。なお、*De dialectica* に限

り、ラテン語の'ぅは、底本に従う、そのままにした。

(3) [1410. 29] Verbum est uniuscuiusque rei signum, quod ab audiente possit intellegi, a loquente prolatum. Res est quidquid vel sentitur vel intellegitur vel latet. Signum est quod et se ipsum sensui et praeter se aliquid animo ostendit. Loqui est articulata voce signum dare. Articulatam autem dico quae comprehendi litteris potest.

(4) 次節を参照。

(5) [1411. 18] Quod dixi verbum, et verbum est et verbum significat. Quod dixi dicibile, verbum est, nec tamen verbum, sed quod in verbo intellegitur et animo continetur, significat. Quod dixi dictionem, verbum est, sed quod iam illa duo simul id est et ipsum verbum et quod fit in animo per verbum significat. Quod dixi rem, verbum est, quod praeter illa tria quae dicta sunt quidquid restat significat.

(6) [1411. 73] Ecce enim 'verba' ipsa quispiam ex eo putat dicta quod aurem quasi verberent. Immo inquit alius quod aerem. ... Sed de transverso tertius vide quam rixam inferat. Quod enim verum nos ait loqui oportet odiosum sit natura ipsa iudicante mendacium, 'verbum' a vero cognominatum est.

(7) cf. Arist. *De interp.* 16a5f, καὶ ὥσπερ οὐδὲ γράμματα πᾶσι τὰ αὐτά, οὐδὲ φωναὶ αἱ αὐταί· ...

(8) [1413. 60] Vis verbi est, qua cognoscitur quantum valeat. Valet autem tantum quantum movere audientem potest. Porro movet audientem aut secundum se aut secundum id quod significat aut ex utroque communiter.

(9) [1413. 67] Natura movetur cum offenditur, si quis nominet Artaxerxen regem, vel mulcetur, cum audit Euryalum. Quis enim etiamsi nihil umquam de his hominibus audierit, quorum ista sint nomina, non tamen et in illo asperitatem maximam et in hoc iudicet esse lenitatem?

(10) [1414. 8] Iam vero non secundum se, sed secundum id quod significat verbum movet, quando per verbum accepto signo animus nihil aliud quam rem ipsam intuetur, cuius illud signum est quod accepit: ut cum Augustino nominato nihil aliud quam ego ipse cogitor ab eo cui notus sum, aut quilibet hominum menti occurit, si forte hoc nomen vel qui me ignorat audierit, vel qui alium novit qui Augustinus vocetur.

(11) [1414. 16] Cum autem simul et secundum se verbum movet audientem et secundum id quod significat, tunc et ipsa enuntiatio et id quod ab ea nuntiatur simul advertitur. Unde enim, quod non offenditur aurium castitas, cum audit manu ventre pene bona patria laceraverat?

(12) *SVF*, II. 221-223.

(13) 'penis' よりも語の上品さ〇〇らとは、cf. Cicero, *De offi.* I. 35, 127-128.

(14) *De mag*. 10. 33 Quod si diligentius consideremus, fortasse nihil inuenies, quod per sua signa discatur. Cum enim mihi signum datur, si nescientem me inuenit, cuius rei signum sit, docere me nihil potest, si uero scientem, quid disco per signum? Non enim mihi rem, quam significat, ostendit uerbum, cum lego: Et sarabarae eorum non sunt commutatae.

(15) *De mag*. 11. 36 Hactenus uerba ualuerunt; quibus ut plurimum tribuam, admonent tantum, ut quaeramus res, non exhibent, ut norimus. Is me autem aliquid docet, qui uel oculis uel ulli corporis sensui uel ipsi etiam menti praebet ea, quae cognoscere uolo.

(16) *De mag*. 11. 38 De uniuersis autem, quae intelligimus, non loquentem, qui personat foris, sed intus ipsi menti praesidentem consulimus ueritatem, uerbis fortasse ut consulamus admoniti. Ille autem, qui consulitur, docet, qui in interiore homine habitare dictus est Christus, id est incommutabilis dei atque sempiterna sapientia.

(17) Nonne ab infantia huc pergens ueni in pueritiam? Vel potius ipsa me uenit et successit infantiae? Nec discessit illa: quo enim abiit? Et tamen iam non erat. Non enim eram infans, qui non farer, sed iam puer loquens eram.

(18) Et memini hoc, et unde loqui didiceram, post aduerti. Non enim docebant me maiores homines praebentes mihi uerba certo aliquo ordine doctrinae sicut paulo post litteras, sed ego ipse mente, quam dedisti mihi, deus meus,

(19) cum gemitibus et uocibus uariis et uariis membrorum motibus edere uellem sensa cordis mei, ut uoluntati pareretur, nec ualerem quae uolebam omnia nec quibus uolebam omnibus.

(20) Prensabam memoria, cum ipsi appellabant rem aliquam et cum secundum eam uocem corpus ad aliquid mouebant, uidebam, et tenebam hoc ab eis uocari rem illam, quod sonabant, cum eam uellent ostendere.

(21) Hoc autem eos uelle ex motu corporis aperiebatur tamquam uerbis naturalibus omnium gentium, quae fiunt uultu et nutu oculorum ceteroque membrorum actu et sonitu uocis indicante affectionem animi in petendis, habendis, reiciendis fugiendisue rebus.

(22) Ita uerba in uariis sententiis locis suis posita et crebro audita quarum rerum signa essent paulatim conligebam measque iam uoluntates edomito in eis signis ore per haec enuntiabam.

(23) Sic cum his, inter quos eram, uoluntatum enuntiandarum signa communicaui et uitae humanae procellosam societatem altius ingressus sum pendens ex parentum auctoritate

nutuque maiorum hominum.

(24) 詳細については、cf. 水落健治「子どもはいかにして言語を学ぶか――アウグスティヌス『告白』1・8・13の解釈」、『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』第一二九号（二〇〇八年一二月）一三三―一六一頁。

(25) ギリシア語 συλλογίζεσθαι のラテン訳である。cf. 前掲論文、注27。

(26) アウグスティヌス『キリスト教の教え』教文館「アウグスティヌス著作集」第六巻、一九八八年、加藤武による解説、三二一―三二三頁。

(27) ストア的に表現すれば「もし煙があればその下には火がある。∴煙は火の〈しるし〉である」、「もし足跡があれば動物がいる。∴足跡は動物の〈しるし〉である」となる。

(28) 'uel sena aut intellecta' の 'uel ... aut ...' は、'uel A uel B' ないし 'aut A aut B' の変容形と考えられる。

(29) *De doct. chr.* 1. 6. 6, Non enim in strepitu istarum duarum syllabarum ipse cognoscitur, sed tamen omnes latinae linguae socios, cum aures eorum sonus iste tetegit, mouet ad cogitandam excellentissimam quandam immortalem naturam.

(30) ここに掲げられる頷きと身振りは、この点において『告白』第一巻で述べられた〈自然的なことば〉uerba naturalia とは異なっている。

(31) これら三つの実例が、いかなる仕方で「〈社会的契約〉によって成立する〈しるし〉」となるのか、という問題はきわめて興味深い問題であるが、この点については改めて考えることにしたい。

「付記」本論考は、教父研究会第一七六回例会（二〇一二年三月二六日）で行われたシンポジウム「アウグスティヌスの言語論―再考」における発表「アウグスティヌスの言語思想の展開――『問答法について』から『キリスト教の教え』まで」をもとに執筆されたものである。